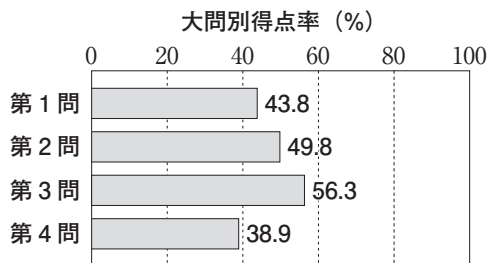
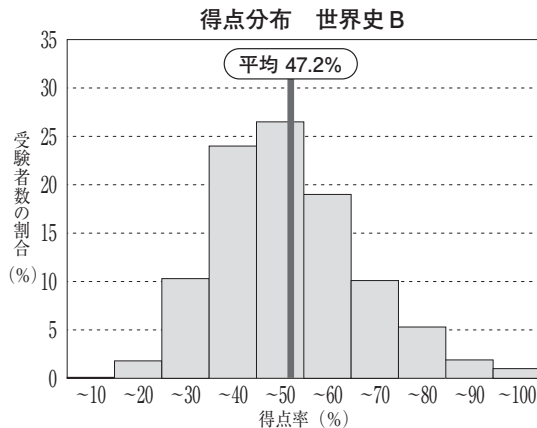


世界史B

年代も含め、正確な知識を着実に身につけよう。

I. 全体講評

今回の平均点は、47.2点であった。前回に続き、古代史等すでに学習し終わった部分については正答率が高かったが、未習と思われる近現代史については正答率が低かった。今回気になったのは、年代整序の問題の正答率が低かったことである。第1問問3、第2問問6、第3問問5の正答率が、33.9%、31.5%、33.0%と低迷した。正確な知識を身につけることが必要のようである。今回も近現代の日本に関する第1問問9があったが、正答率は67.0%と近現代史としては良くできていた。この内容は中学の歴史分野で学ぶ内容で、そのことが記憶に残っていた結果であろう。このように、中学時点での日本史は、世界史受験の前提となることもあるので復習しておく必要がある。



II. 大問別分析

第1問 芸術家や作家の活動とその時代

中国史とりわけ文化史をしっかりと復習しよう。

中国文化史で明代の文化を問うた問4の正答率が36.0%、元代の文化を問うた問5の正答率が33.3%と低かった。また中国古代史を問う問6も正答率は33.0%と低かった。中国史の文化史は学習が忘れがちになる部分である。各時代を代表する文化史の人物、その業績はきちんと覚えておく必要がある。問6の司馬炎と占田・課田法、五胡の侵入を招く八王の乱、前漢の呉楚七国の乱は中国史の基礎的事項なのでこの結果は残念なものであった。反対に、ヨーロッパの古代史を問う問1、問2はそれぞれ63.7%、54.6%とまずまずの正答率であった。学習の成果が発揮できたと言えよう。この大問の中で最も正答率が67.0%と高かったのが問9の日中戦争と南京の位置を問う問題であった。同じように中学の歴史分野で学んだであろう日清戦争の問題問7が正答率50.0%と低かった。また、ヨーロッパ近代史の基本を問う問3は年代整序の問題ということもあり正答率33.9%と低かったのも残念な結果であった。アメリカ合衆国の現代史を問う問8の正答率34.9%は今後近現代史を学習していけば上がっていくであろう。

第2問 求法の旅や巡礼について

年代整序の問題に慣れよう。

問6の年代整序の問題は、他の問題整序同様に低い正答率で31.5%であった。この問題ができないのは、ヨーロッパ史の巨視的な流れを、受験生が理解していないことにあるようだ。最初の覇権国家オランダが挑戦者イギリスと争ったのが17世紀、七年戦争でオーストリアとプロイセンが争うのは18世紀、フランスがドイツに敗北するのは19世紀と理解していれば間違える問題ではないと思われる。正答率36.1%と低かった問1は玄奘と法顕を混同している受験者が正答した受験者と同じくらい

た。陸路でインドに行ったのは、東晋の法顕と唐の玄奘で、海路でインドに行ったのは唐の義浄であることを、その著作とともに整理しておく必要がある。同じく正答率 32.3% と低かったのが現代イランの問題問 9 でイラン革命を指導したホメイニを知らない受験者が多くいたことには驚かされた。逆に正答率が 66.0% の仏教の問題問 3 や正答率 64.9% のインド古代史の問題問 2 は学習済みの内容だからか良くできていた。問 4 の中世ヨーロッパ史の十字軍の問題も学習済みの内容であろうが、53.7% と正答率がそれほど高くなかった。問うている内容が、基本的な点なので確実に答える必要があろう。正答率が 56.8% とまずまず高かったイスラームの問題問 7 は基本であるが、スーフイズムの問題問 8 (56.7%) は健闘したと言えるであろう。問 5 のスペインの問題は、未履修の近現代史の部分も含んでいた正文選択なので、基本的な問題であったが正答率 47.6% という数字だった。

第3問 世界史上の情報伝達

基本的事項は正確に覚えよう。

この大問の得点率は 56.3% に達し、全大問中の最高値となった。古代中世の設問が、4 問あったことと近世・近代の問題が基本的だった結果であろう。問 3 のローマ史は正答率 70.2% と今回の模試で最も良くできていた。ほとんどの受験者の既習の内容であったようだ。問 1 の古代エジプト史も同じように正答率 66.0% と良い結果であった。近代の基本であるマルクスの著作を問う問 6 と「コモン=センス」の著者を問う問 8 も正答率 61.4% と 61.9% という結果で、学習の成果がでていた。また現代史でも、孫文のスローガンを蒋介石にした誤文選択の問 7 の正答率は 63.1% に達したことも喜ばしい結果であった。この大問で最も結果が悪かった正答率 33.0% の問 5 は年代整序の問題であり、間違いの原因は三十年戦争と農民戦争を間違えたことの結果のようである。問 2 の古代オリエント史の問題も既習の内容と考え、正答率 52.3% は満足のいくものではない。印刷術を問う問 4 も中国史でつまづく受験生の結果が正答率を 52.0% にとどめた。決して易しくはなかった 19 世紀の年表補充の問題問 9 の正答率 47.3% は、健闘した結果であった。

第4問 世界史上の国家

東南アジア史・朝鮮史を整理しておこう。

得点率は 38.9% にとどまり全大問中最低となった。近現代史の問題が多かったこと、どうしても学習が後になりがちな東南アジア史、朝鮮史の問題があったことが一因であろう。ベトナム史の問題問 4 は、正答率 25.5% と今回の全小問中の最低値となった。朝鮮史の問 3 も正答率が 36.1% と低いものであった。全小問中ワースト 2 の正答率 25.9% の問 9 は、現代ヨーロッパ史の問題であった。近代ヨーロッパの問題問 8 も 28.3% と低いものであった。ともにまだ未習の受験生が多かった結果であろう。これに対して、ポロブドゥールの位置を問う問 6 の正答率は、68.9% と高いものであった。漢字がでてくるベトナム史を除く東南アジア史は、パレンパンの位置を問う難解な問 5 の正答率 43.1% を含んで、満足な結果を残している。現代中国を問う問 1 の問題は、基本的な年表補充の問題であったが、正答率は 43.2% と高いものではなかった。中国文化史を問う問 2 も正答率 37.6% と振るわなかった。現代アメリカ史を問う問 7 は、正答率 39.0% と健闘した。ケネディ大統領の事跡は結構知られているようである。この大問は、他の大問と違って基礎的事項だけでない部分を含んでひとひねりしたものであった。このことが得点率を低くした一因であったようだ。

Ⅲ. 学習アドバイス

◆基本を確実に身につけよう。

センター試験では様々なテーマのリード文にもとづいて設問が出されるが、各小問は教科書レベルの基礎的知識で十分に対応できるので、幅広い基礎力の養成がポイントとなる。その際に資料集などの地図や図版を合わせて参照し、立体的な学習に努めることを必ず実践してほしい。世界史は現代の世界に直結している。毎日のニュースに関心を持って見聞きしよう。